View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Hiroshima University Institutional Repository

〈第62号　2015〉

文学作品における読みの探求

―「形」（菊池寛）の場合―

三　根　直　美

「形」（菊池寛）は、中学校の教材として魅力的なものである。百年近く経っている小説であるにも関わらず、中学生には読む上で敷居が高くない。より深い読みのための方策として、明らかになった点を次にあげる。

原典である「常山紀談」との比較や、作者が伝えたかったことは何かという大きなテーマをペアやグループで話し合い、全体に発表する授業展開を取り入れた結果、グループ内で活発な議論がなされた上、質問カードの実施・交換により、さらに深い読みに通じていくものとなった。資料の作成においても、できるだけ簡単な一文でまとめさせ、わかりやすく、根拠のある説明がなされているかに気をつけさせた。その結果、曖昧なまとめ方をして資料を作成しているグループは、矛盾した点が指摘され、事前の資料作成に必要なことが認識された。

また、話し合いのテーマが「作者が伝えたかったこと」であったため、形の諸相がいろいろと出て、各グループの意見がすべて活かせたことが利点となった。教材の特質もあろうが、あまりテーマが一つに固定されてしまっては意見の相違がない。少しずつ違う意見が出る上、それをまとめていけば抽象化できる。

一　はじめに

「形」（菊池寛）は、大正9年（1920）1月2日「大阪毎日新聞」に発表されたものである。書かれてから百年近く経つ作品ではあるが、時代のギャップを感じさせない、一読して鮮烈な印象を与える魅力的な小説である。中学校の教科書では、三省堂で平成15年度版から採録されている。今までの三度の実践と、研究大会での公開授業を踏まえ、より深い読みへ向けての授業方法を探ってみた。

二　教材の持つ魅力

①短編であること

千六百字程度の短編であるので、文章全体に目が配りやすい上、様々なことを考えやすい。これは、教材として最適な理由の一つである。森鴎外「最後の一句」を二学期に大学院生が実施クラスで扱った際、長文であることが読解の支障になっていたことがある。

②語られるテーマの重要性

幼少期から大人にいたるまで、私たちの人生や生き方に大きく関わってくるのが「形」である。特に我が校の場合、生徒達は受験を経て中学に入学して来るため、「広大附属」というブランドに拘っている現実があることは確かである。

形に拘り続ける人間、形に翻弄される人間の姿は、いつの時代でも同じである。私たちの周囲にはどんな「形」が存在し、私たちはそれをどう認識し、行動しているのかを知ることは大切な事である。しかし、菊池寛は高みに立って形に翻弄される人間を非難、批判しているのではなく、人間の偽らざる真の姿として認めており、同情している立場で書いているのではないか。

わたしたちは人生の表側では、なによりも内容（こころ）が大切だと信じつつ、一方でリッチでカッコいい外見を追い求めている。いかにも、これは矛盾である。ただし、矛盾しているから悪いというのではない。しかと見つめるべき肝要な問題は、このように、いかに人間が矛盾にみちた存在でありながら、このことに無自覚に平

Naomi MINE : Exploring Reading with Literature: A Case Study of Reading *Katachi* by Kikuchi Kan

然と日常生活（人生の表側）をすごしているかということである。「形」の中村新兵衛は、猩々緋の服折と唐金の兜という過剰な〈形〉を脱いだとき――いわば〈裸の王様〉になったとき――、この虚妄の構造に思い至ったのである。ということはつまり、この小説は〈形〉が大切だとか、〈内容〉の伴わない〈形〉はむなしいとか、あるいは〈内容〉も大切だが〈形〉も大切だとか、そんな結論めいた結論をとおりこして、ここにひとつの問題の所在があることを読者に向かって喚起していることになる。したりげな解答は用意されていない。（注1）

花田氏の指摘通り、「形」の問題化がテーマだと考えられる。そうした人間の姿を見つめ、考えていくためにも、よいテーマだと考えられる。

③表現の巧みさ

新兵衛の高い評価は、「侍大将」「五畿内、中国に聞こえた大豪の士」「槍中村」「先駆けしんがり」などの表現からわかる。また「先駆けしんがり」は言葉の指摘だけでなく、どんな使命を受けた危険な役割か、イメージさせる必要がある。

また、一段落では特に「水際だった（華やかさ）」「輝くばかりの（鮮やかさ）」などの強調表現、「そのうえ」「また」などの添加、「恐らく…〈だろう〉」という推量の副詞、助詞副助詞、「どれほど…分からなかった」の繰り返し、「火のような」「激浪の中に立ついわおのように」「嵐のように」「戦場の華」などの比喩表現、「敵に対する脅威」「味方に対する信頼の的」という対比表現と、相当意識された表現が続く。取り立てて味合わせたい。

④原典との比較が可能であること

原典である「常山紀談」は、江戸時代中期に成立した戦国武将の逸話集である。戦いに勝つ方法が淡々と綴られている。比較すると明確なのは、まず新兵衛が猩々緋と唐冠のかぶとを貸した人物は「ある人」で、しぶしぶ貸しているのに対し、「形」では新兵衛が守役として我が子のように慈しみを持って育ててきた若侍と設定され、快く貸している。また、猩々緋と唐冠のかぶとを貸してしまった新兵衛が多数の敵を殺しながら、死んでしまったと書くのに対し、「形」は二、三人突き伏せることさえ容易でなく、貸したことを後悔する気持ちが出て、「槍が脾腹を貫ぬいていた。」と書かれる。一番の違いは、原典では教訓「敵を殺すの多きをもつて勝つにあらず。威を輝かして気を奪ひ、勢を撓すのことわりを暁るべし。」と書かれている。戦いに勝つための必勝法が書かれているのは書物の主旨として当然だが、菊池寛はこれを書かず、死すらぼかしているところに文学たる所以があろう。文学作品を教訓的に読む傾向にある生徒に対して、原典と明らかな違いがあるこの作品の場合は、比較読みが効果的である。

三　授業の実際

実施時期　平成27年11月
対象生徒　広島大学附属中学校　三年C組　38名（男子19名、女子19名）
教材　「形」（菊池寛）　東京書籍　平成27年度版
学習目標
1　難語句を調べることを通して、その意味や用法を理解し、読解に活かしていく。
2　叙述を丁寧に押さえる事により、イメージ豊かに作品世界を読みとる。
3　グループで出た意見をまとめ、わかりやすく人に伝えるように資料を作成し、発表する。
4　この作品に描かれた「形」とはどんなものかを考える。

授業展開（全七時間）

1　通読後、感想・疑問を書く。原典「常山紀談」との比較をペア学習でして、発表する。語句調べは課題。
2　㊀㊁の読解をする。→【板書1】
3　㊂㊃の読解をする。→【板書2】【板書3】
4　「作者が伝えたかったことは何か」についてグループで考え、資料にまとめる。
5　資料を見合って、質問カードに書き、相手のグループに渡す。グループ内で質問を整理し、回答を考える。
6　各グループが質問に対して回答していき、まとめる。→【板書4】
7　私たちの生活の中での「形」には、どんなものがあり、自分はそのことに対してどう考えるか、どう対処しているか文章にまとめる。

【板書1】

一

「形」（菊池寛）

〈今〉

中村新兵衛

侍大将

五畿内中国に聞こえた大豪の士

「槍中村」

先駆けしんがりの功名

猩々緋の羽織

唐冠纓金のかぶと

敵　脅威

味方　信頼

手柄

功名

〈初陣〉

目立つ　格好の目標

【板書2】

二

若い侍（主君の子）　初陣

猩々緋と唐冠を貸してほしい

憧れ、手柄をたてたい

みんながおじけづく

快諾

新兵衛

子供らしい無邪気な

功名心だと思う

高らかに笑った

かわいいやつ・自信・得意

形　**誇らしい**　**ご機嫌**

肝魂（気力・実力）

【板書3】

三

猩々緋の武者

松山新介の子

いつものように

三、四人の端武者

突き伏せて

悠々

「ああ、槍中村だ」

うろたえ

おじけ

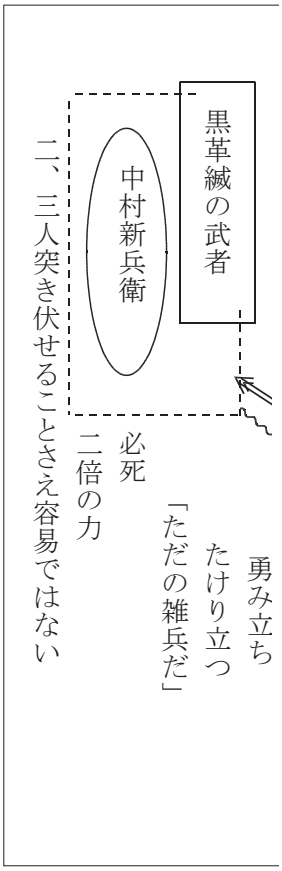
敵の兵

会心の微笑

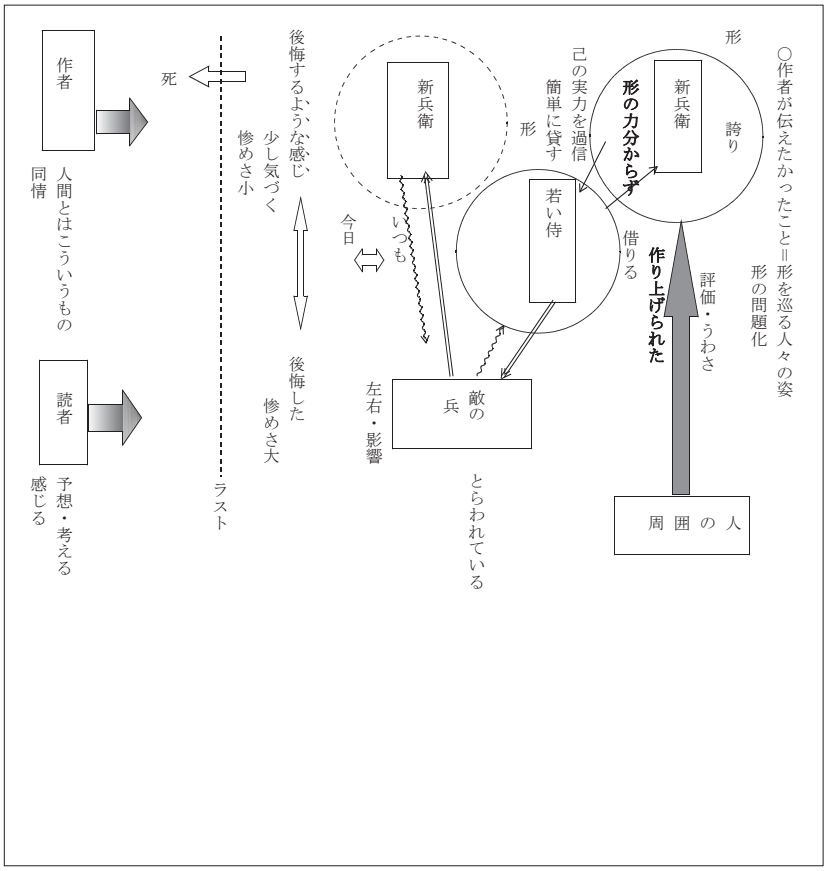
大きな誇り

復讐せん

三



【板書4】



生徒の受け取り方

（1） 初発の感想・疑問の分析

平成19年のデータは、本校の先生が広大附属中学校3年生一クラスに取ったもので、各自で通読後、感想・気づき・疑問・みんなで一緒に考えたいことを簡単にメモさせている。データは29人分ある。疑問点が多くあげられていて、感想は以下の通りである。〈　〉内の数が同じ意見の人数で、ないものは一人。

■新兵衛の負け・死について

かわいそう〈2〉 うかつだ

■形について

形によって物事の勝手が変わってくるということがよくわかった

形の方が自分より力があった気がする

格好が強さのもとだったのか

人からのイメージの積み重ねは大切だと思う

人は外見やその人の印象でずいぶんと態度が変わる

■教訓として捉えているもの

気持ちで勝つことが大事〈2〉

ものの本質を形で判断してはいけない

見た目にだまされるな

自分の力を過信するな〈2〉

人は見かけが9割〈3〉

何か起こるか分からないので、十分に用意をして敵をみくびってはならない

■話の中身がよく分からなかった、漢字の多さに抵抗を感じている生徒は二名と、比較的少ない。

平成27年

■新兵衛の負け・死について

かわいそう・哀れ〈3〉 滑稽だ・自業自得〈2〉

■形について

実力よりも、気持ちの持ち方によって、人の強さが変わる、振るまい方が変わる〈4〉

形・イメージの影響力の大きさに驚いた、見た目は大事〈7〉

四

身にまとっている形によって自分に対する相手の対応や思いが違ってくる
人は本質をまず見るのではなく、見かけ、外見によって判断されやすい〈2〉
戦いでは相手を圧倒させる威勢・気迫がいる〈2〉
形がなくなるといつもの力は出せない
■教訓として捉えている
油断大敵・万全の体制で物事に臨むべき〈4〉
気持ちの持ち方によって人の強さが変わる
自分と同じ一人の人間なので、何も特別視して押される必要はない
周囲が作った自分の形に陶酔することは、我が身を滅ぼす
■表現〈3〉
ラストがよいなどストーリーや比喩表現、対比に着目している。
■話の中身がよく分からなかったとか、漢字の多さ、言葉の難しさに抵抗を感じている生徒は六名と、比較的少ない。

19年と27年の違いはあまりない。やはり新兵衛への同情、非難はあるし、教訓と捉えている生徒も多い。形について抽象的にとらえた感想が多いのも同じである。違いはストーリーや表現に着目している生徒が27年には少しいることだ。

疑問点
●平成19年
なぜ新兵衛は自分の形を貸したのか
若侍が新兵衛の形を借りた理由は。借りて戦っている時に若侍は何を考えていたのだろう。
なぜ新兵衛を見て、敵はひるまなかったのか。
なぜ本来の形でないといきなり弱くなったのか。
後悔した新兵衛を他の人はどう思ったのだろうか。
最後に脇腹を突かれたのは、死をあらわしているのか。タイトルの意味。
●平成27年
実話なのか。　新兵衛が若侍に簡単に猩々緋と唐冠を貸した理由は。
若侍が借りた理由。　新兵衛の言葉「念もない」の意味は。
新兵衛の「我らほどの肝魂を持たいではかなわぬことぞ」の意味〈2〉
若侍のその後は。新兵衛の訃報を聞いた若侍はどう思ったか。
新兵衛が二番槍を合わそうとした理由は。
新兵衛は死んだのか。〈3〉　新兵衛の死後の評価はどうだったのか。
強かった新兵衛が刺された理由。新兵衛には本当に力があったのか。
題名の意味。作者がこの作品で表したかったものは何か。

疑問においてもほとんど同じである。違いは19年では、若侍の戦っている際の気持ち、27年では新兵衛の訃報を聞いた時の若侍の気持ち、新兵衛の死後の評価など、書かれていない部分の疑問が出ている点である。
八年経過していても、「形」という小説に対する生徒の受け取り方は、ほとんど違いはないと判断してよいだろう。わずかながら分からないという生徒もいるが、若干名なので時間がたったから生徒が受け入れにくくなったとは考えられない。

（2）　話し合い、発表資料、質問カードの分析とその扱い方
今までの実践では、班での話し合いは授業過程の中で組み入れていなかった。授業では、「形」という題名がついているように「形」が表現されている。描かれている形を「形」から始まる文章で書けという指示をした。
挙げられたもの、想定していたものとしては
①形に左右される人々　②形にこだわり、名を上げようとする人
③形は内実がなくても、威力を出すことある。④形と内実は切り離せない。
⑤形を伴わぬ内実は死を招く。⑥形は周囲がつくるもの。
⑦形の過信は実力を落とす。
である。時間がなく、生徒からは全部は出ず、授業者から出してまとめてしまう傾向が強かった。
今回は、座席で機械的に分けた8グループ（四～五人）で話し合いをさせた。実施クラスでの話し合いの授業は、一学期から広島大学の院生による授業で二回実施されている。また通常から、理科、英語では協同学習が実施され、グループによる話し合いに慣れている土壌がある。実際に、指示すればすぐ机を移動させて話し合いがなされ、指導者が進行を助ける事は必要なかった。ただ、資料のまとめ方については助言をしないと難しいグループがあった。さらに、話し合いの深まりがあまりないまま、出てきた意見の羅列

五

をした資料であったり、結論が全体をまとめたというよりも一部分のまとめとしかなっていないグループもあった。

発表資料は、B5の用紙にまず作者が伝えたかったことを短くまとめる枠を作り、そう考えた根拠を左側に説明するというスタイルを取った。この形式を取った意図としては、長々と説明されると何が言いたいのかが分かりにくいこと、根拠とすると、なぜそう言えるのか、説得するための材料・本文の叙述が具体的に多く出るに違いないと判断したからだ。また、罫線なども入れず、自由に記述させ、なるべく図式化するようにも促した。

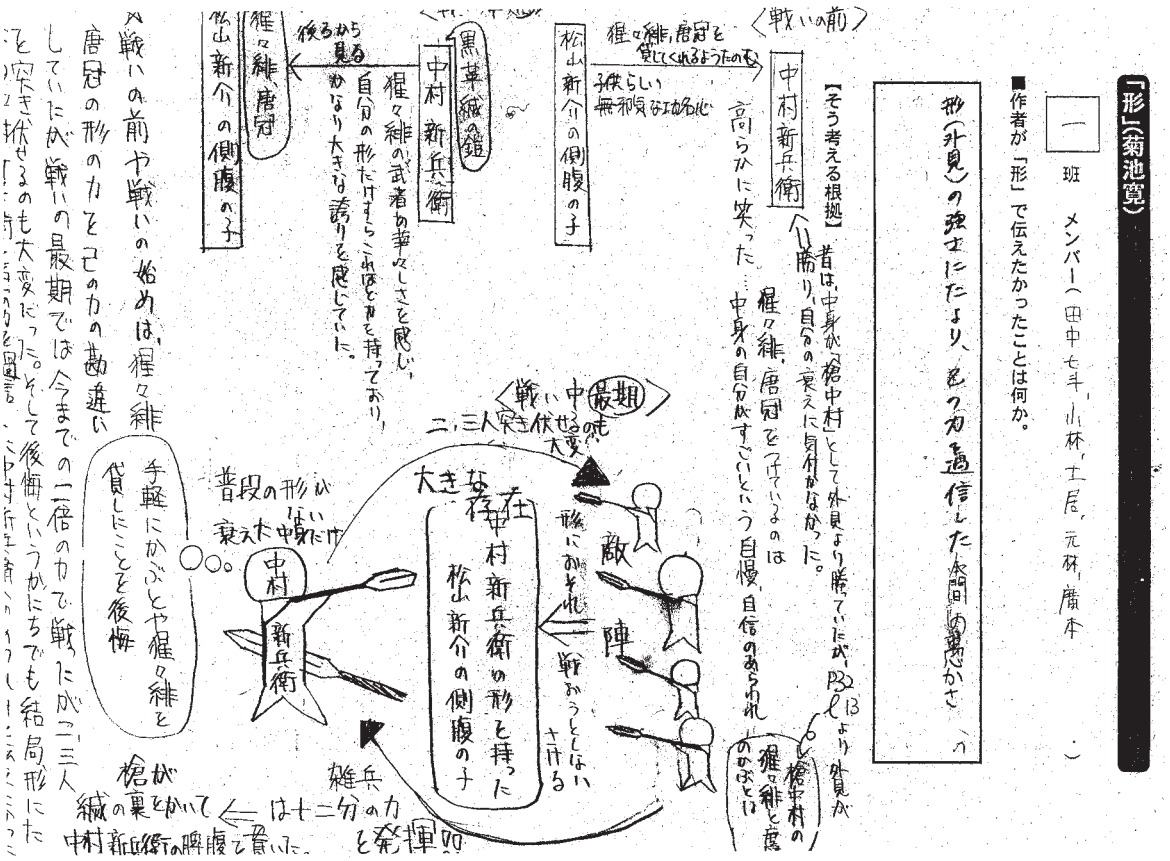
実際の資料を次に挙げる。1班は、資料を書く生徒が複数いたり、授業中に資料を書かず、時間がないため自宅で個人が書いたこともあり、まとまらないままの資料となっている。

さらに7班の資料は、少し図式化がされている。根拠もいくつか羅列されていて、いろいろな面からの指摘がなされていることは素晴らしい。ただ、羅列した項目同士の関係については把握できない部分が課題であろう。

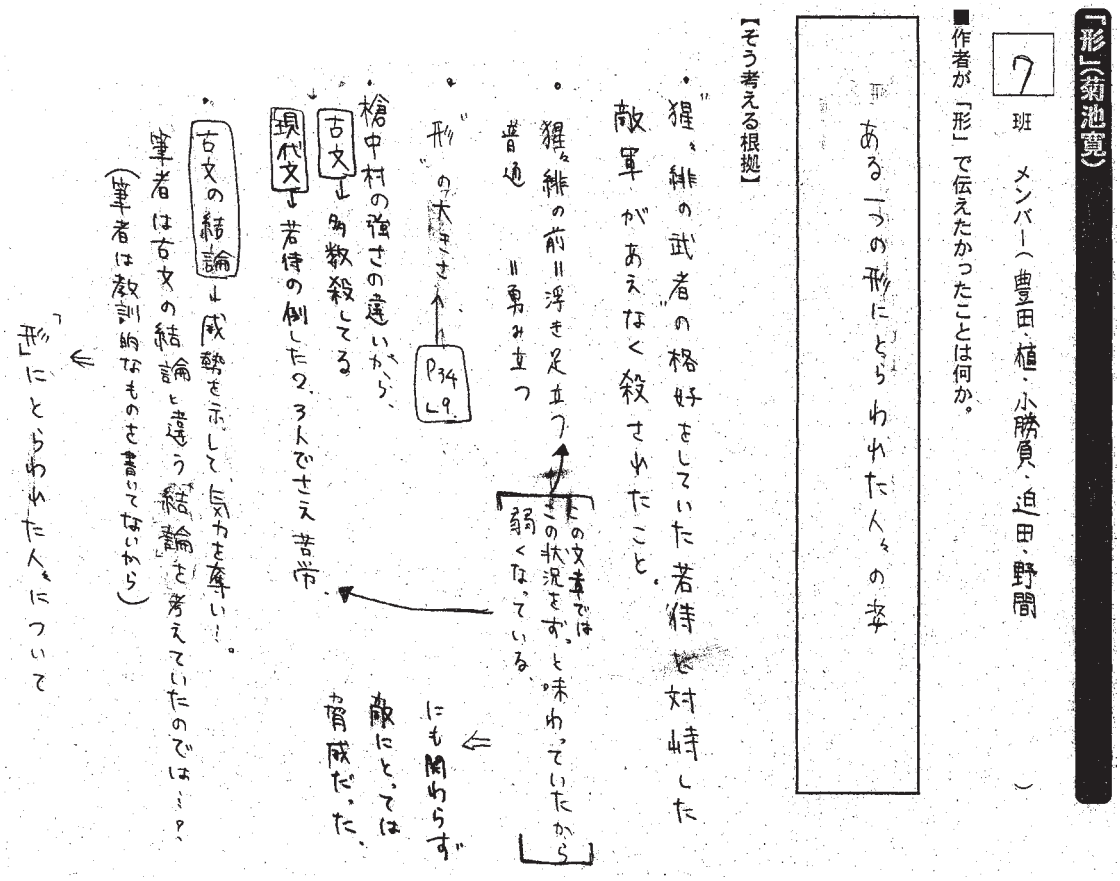
8班の結論は以下の表の通り。

1	形の強さに頼り、己の力を過信した人間の愚かさ
2	同一の物事に対する捉え方は、その人の立場によって異なる。それを多面的に理解することが必要である。
3	形さえあれば実力がなくてもいい。
4	人や他人を見るときに外見の「形」だけで評価せず、中身をちゃんと見て評価すべき。人は外形によって左右されてしまう。
5	人は外形によって左右されてしまう。
6	形が人の心を大きく左右すること
7	ある一つの形にとらわれた人々の姿
8	見た目よりそれを見た人は大きく影響される。

まず、2班と4班は「～すべき、必要である」という教訓型になっている。また、3班は断定的に言い切っていることと、若侍の立場からだけの捉え方である。5班、6班、8班は同じ意見と考えてよいいだろう。7班は、いろ



六



いろな人の立場から捉えている。1班は、新兵衛の立場が中心である。

質問カードについては、

1班

「形の強さに頼り，己の力を過信した人間の愚かさ」

「形の強さに頼り」と「己の力を過信した」が矛盾しているのではないかという指摘と、資料の説明後半の言葉「あわれみ」と結論内の「愚かさ」はどちらが班の意見なのかという質問があり、矛盾点が指摘されていた。

2班

同一の物事に対する捉え方は，その人の立場によって異なる。それを多面的に理解することが必要である。

「多面的に理解」とはどういう事なのかの説明と、必要であるという言い切りの根拠を聞く質問が多かった。また後の説明の「形の関係性」という言葉が何を指しているのかの質問が出た。

3班

形さえあれば実力がなくてもいい。

この班は言い方が断定的であったため、その根拠は何かという点に質問が集中した。回答としては、言い切りすぎたと反省し、若侍よりの言い方になっていたと弁明した。また若侍は実力がないのではなく、形によって自信を得ていつも以上の実力を出して活躍したのではないか、これから先、若侍が形を借りて生き続けることはないのではないかという反論も出ていた。

4班

人や他人を見るときに外見の「形」だけで評価せず，中身をちゃんと見て評価すべき。

形を自らの力と勘違いしたために新兵衛が死んだのなら、形より中身が大切という結論とは合わないと矛盾が指摘された。また、後半の説明と結論との矛盾も指摘された。

資料をまとめる際に、よく皆で話し合わないうちに誰かが勝手に資料を書き出すとどうしても辻褄が合わないところが出てくる。これは1班も同じであった。

七

「すら」という言葉を根拠に挙げていたところ、口頭発表の際に、一段落の最後の一文が主語が「新兵衛」ではなく、「槍中村の猩々緋と唐冠のかぶと」となっている点に注目し、新兵衛という一人の人物を描くのではなく、その形にこだわっていることを指摘していたが、大変評価されるよい気づきだと思われた。

5班　人は外形によって左右されてしまう。

説明部分の「影響されている、されていない」とあるが何にかという質問があった。外形とは何かという質問もあった。

6班　形が人の心を大きく左右すること

人の心には、「形」を得た人を見ている人の心とその「形」を得た人の心が入るという確認の質問がされていた。

7班　ある一つの形にとらわれた人々の姿

「ある一つの形にとらわれた人」とは誰をさすのかという質問が出た。

8班　見た目よりそれを見た人は大きく影響される。

新兵衛の死は作者にとっては取り立てて書くべきことではなかったのだという意見が出た。

質問がいくつも寄せられた為、それに対応する回答を考える中で、自分たちの考えの矛盾点や不十分な点が明確に認識された。その上での話し合いは質問を受けてから考える時間を設けたことで、どの班も資料をまとめた時よりもかなり深化した読みになっていた。通常では発表した直後に質問を受けて答えるパターンであろうが、中学生の場合、その場ですぐに質問や意見、感想は出しにくい上に、質問するには考える時間もいる。そのため、カードに書き込み、班に渡して、準備してから答えるパターンは効果的な方法であると考えられる。

八

今までの授業において、松尾芭蕉『奥のほそ道』中の俳句について個人発表した際にも実践してみたが、資料をただ読み上げるだけの発表より、質問カードの回答を組み入れながら、自分の意見を表明する方が、発表としても内容が濃くなり、ただの棒読みではない、生きた発表になった。また、聴衆側も時間をかけて資料を見るので、落ち着いて内容を確認することができる。曖昧な捉え方をしていると、そのまま文章の端々に出てしまい、質問カードで矛盾点をつかれることとなり、話し合いの深め方についての反省ともなったようである。

（3）現代社会とのつながり

「形」の学習後、社会にある「形」について四百字詰め原稿用紙に書かせた作文に挙がっていたものは、次の通りである。

年齢、学歴・学校名（8）、役職や肩書き〈7〉、外見や見た目（容姿、肌の色、メイク、男女の性差、服装）、世襲制度、部活、名前、会社のグループ名、親や一族、著名であること、ブランド、食品サンプルや広告

部活の試合での経験や自身の現実である「広大附属」という学校名が出てくるなど中学生らしい一方、一般社会での学歴、肩書き、ブランド、人種差別、男女差別などの問題にまで発展して考えられている生徒も多くいた。

四　成果と課題

■話し合い活動の導入とそのテーマ

グループでの話し合い活動は、文学作品においては特に必要である。「作者が伝えたかったこと」という大きなテーマであればなおさらのこと、話し合う中でいろいろな意見が出てくるはずである。「形」ではいろいろな形の姿が出ていて、各グループの意見がすべて活かせたことが利点へと働いた。教材の特質もあろうが、あまりテーマが一つに固定されてしまっては意見の相違がみられない。少しずつ違う意見が出る上、それをまとめていけば抽象化できる。「形」は話し合いに向いている作品である。

また、話し合い、資料にまとめていく中で、どうすれば言いたいことが伝わるのか、その議論も必要である。一人で意見を書いているだけだと出てこ

ないことが話し合いでは出てくる。話している間に浮かんでくるし、まとまってくる。

また質問カードでのやり取りも、さらなる検討に効果的である。資料の矛盾点をつく質問も多くあり、咄嗟の発表ではなかなか指摘できない点である。発表資料の不十分さが指摘されると、そのことをどう弁明するか、かなり議論が為されていた。本当は、質問者がさらに意見を言う場面がほしいところではある。

■表現の特徴に迫る

文学作品の表現について、授業の中ではなかなか目が届きにくいのだが、今回は、

「槍中村の猩々緋と唐冠のかぶとは、戦場の華であり、敵に対する脅威であり、味方にとっては信頼の的であった。」という、主語が新兵衛ではない部分。

「自分の形だけすら、これほどの力を…」

「いつもとは」「いつもは」「今日は」

「二、三人突き伏せることさえ、容易ではなかった。…ともすれば、…平素の二倍もの力をさえふるった。が、彼はともすれば…」

などの繰り返し、副助詞、対比表現も発表の中で押さえていくことができた。

「後悔するような感じ」と「後悔した」との違い、「貫いていた」と「貫いた」の違いなどが合わせて押さえられたら、さらに作者の思いに迫れただろう。

引用文献

（注1）花田俊典、「菊池寛「形」鑑賞――松本清張の講演を援用しつつ――」、九州大学日本語文学会『九大日文』編集委員会『九大日文』2、2003年、97）

九